



ーシーズン1「SMクラブの受付」ー

エピソード4：現場にあるもの

しすてむ♥□きよたけ

エピソード1で綴った葛藤を再度書くこととなりますが、書いていくうちに「やっぱり書かないほうがいいかも？」と問っている最中です。読んでいる人はそんなにないだろうと思う一方で、少なからず現場に影響を与えてしまうことも、無きにしも非ず、と思う時もある。また、そもそも、人って、言いたくないことや敢えて隠して過ごしていることもあると思うから。

しかし、今回も「SMクラブの受付」を書くに至りました。当時、ボスに「何か書いてもいいよ」と言われたことがあったのですが、それはできなかったことを振り返ると、もしかすると今、過去の出来事だから、振り返ることができるようになったのかもしれない。そして、影響を与えることもあるかもしれないと思いつつも、書いていいと言われていたことが、今に繋がっているようにも思っています。

これらを振り返ると、タイミングはその時々を訪れるし、それを活かすもその人ができることだと思うので、適度にやり過ぎて生きていくことも人にとって大切な営みの一部のように感じています。当然、人

は他人に言わないことだってある、そのことを大事にできないだろうかと問うている自分に気づいたということです。

前回の話題にもあげた（と思う）職種や嗜好の印象から、「人には言えない」という言葉を置くならば、言わずとも社会的にネガティブな職の位置にある、と書き（書いたっけ?）、公開している自分を問うと、ネガティブな局面だけではないと感じる機微があったのだと思います。

「人には言えない」職。だが、無くならないという現実。たとえ、法が変わったとしてもあり続ける現状を通し、「人には言えない」ことがあるからこそ、成立している「職」「場」もある。客やキャスト、僕ような受付といった「人」がいる。

そこで働く人たちの試行錯誤している姿は、内容がどうであれ、一先ずそこで頑張ってみようとしている姿でした。嗜好は受け入れがたかった僕を振り返ると、彼女たちに、次第に受け入れてもらっていたのかもしれない。

僕は、現場に入ったことで、人って、変化に順応する一方で、初めから容易に受け

入れられるものではないことも感じました。

（「清武システムズ」も変化のための装置と
言っていて動いているので、意味不明だったり、
場違いだと不信がられることも多く、この
ことも気づき経験の一つとなっています）。

結論、僕が思っていた性風俗のイメージ
は、キャストや同僚たちによって変わった
ということ、そこには、そもそも知人だっ
た、貴子の不気味で繊細で華麗である才能
に興味を持ったことが影響していました。

これらがあるから今の僕は、以前に比べ
「受付だった」と気楽に話すようになった
のでしょう。そして、書き始めて、渦中に
いると気づかないことも多かった〜と知り
ました。

渦中ではないことを活かして、渦中にあ
る人でありたいものです。あたかもまとめ
て主審を出すだけの存在になんかなりたく
ない、と思っているのでしょう。

SM クラブの受付から脱線しているよう
ですが、僕の中ではそうでもありません。

プレイがあるから、日常を感じることに
あると思うのです。嗜好への共感はともか
く、僕の気づきは、非日常を味わうことで
日常を意識していたからです。言い換えれ
ば、いつもと違うことを導入することで起
こる気づきがあるのでしょう。

嗜好体験はなかったとしても、僕も SM
経験者に変容していたのだと思います。前
述したことは、エピソード 1 で軽い雰囲気
で書いたことと重なりますが、僕にとって
予想外な場、人により貴重な経験が創られ
ていたということです。

「言えない」現象も、そこにはその意
味があるように思います。そして、「言えち
ゃう」現象には個人の変化、周辺の変化に
よって始まる気がしてなりません。

そこで、今回は僕の体験には、そもそも
「予想外」が前提にあったと気づいたので、
まず、どのような前提のもとで性風俗業界
が認識されているか、綴ります。気づき体
験になった元とでも申しませうか。

自分の体験を鏡のようにして書いていき
ます。当時調べたり、動いてみた経験や体
験、風俗でお遊びする人の周りにいる女性
の声なんかを交えています。そのあとに、
本エピソードに入っていきます。いずれも、
五月雨式の綴りなので、答えは明示してお
りません。



※注意 or 耳寄り情報※

プロローグ以降、お食事中の方は、表現
により、不快に感じる場合がございます。
好まれる場合もございます。

プロローグ

風俗を通じて知る日常の性的行為

～個人と役割、そして、ちまたで聞いた声から～

性風俗に対するネガティブな印象とは一
体どのようなものだろうか。

ネガティブ・ヴォイスを整理すると、性

的に淫らな人だとか、身体を売っているだとか、メンタル的に問題がある、または、そんな仕事をするからメンタルに問題を来たすといったものだった。覚えているくらいだから、もしかすると僕もそんな印象を持っていたかもしれない。

ココロと労働形態

この業種には、精神疾患を持っている人も少なくはないと聞いたことがある。ここだけで判断することは如何なものかと思うが、一度考えたことがあった。キーワードとなったのは「勤怠」。勤怠を通して綴ってみたいと思う。業界外でも、話題に上がるので、あえて共通のキーワードなんじゃないかと思った。

彼女たちの勤怠を思い出してみると、当日お休みすることだってあった。薬を常用している人や障害者手帳を持っていた人もいたのではなかろうか。かといって、彼女たちを病人として扱ったことはなかったほどに、皆と待機室で過ごし、プレイに出かけていた。とても仕事熱心だと思った。

一方、すぐに辞めてしまう人もいた。辞めたけど業界内を渡り歩きたどり着いている人もいた。続かないのだ。

職場外の人から聞いたことだが、完全に他の仕事に転職したいけど、他の仕事をしたことがなく、行けない人たちもいるらしい。全く別の分野に行くことはそう簡単ではなく、経験を活かし、歩んでいるようだ。

メンタル的な課題に着目されることである。もちろん、僕があった限りの話なので、一概にそんなものはありません！と

断言仕切れない事実かもしれない。だが、そうでない事実もあるので、綴ってみる。

雇用形態から書いてみよう。性風俗は、出勤するも欠勤するも自分で判断して良い。シフト制であり、人員が足りないから何と少しでも出勤しなければならないという職場ではない。だから、一般的な感覚で、当日欠勤は怠惰だと断言し難い。だが、一般的な感覚で問えば、勤怠が悪いと都合よく働いている人のように受けられ、向上心がないようにも捉えられる。また、客の不満を言おうものなら、その人の人となりやプレイ技術の無さが問われることもある。

しかし、同じような勤怠状況や転職の繰り返しは、他の就労の場でも起きている。僕の場合は、定職に就かず、同じような動きをしていた。経営者が変わって人員カットでサービス悪化や負傷、長時間労働による体調不良、ある人は ok と言ったけどいつの間にか勝手にしているとなり、批判される等が契機だった。打破を試みたが、はじめに言ったよね？とか、決定事項だからという言葉一つで進まない現状に直面した。そして、次の職場へ流れていくこともあった。

風俗嬢とアルバイトだった僕、どちらが怠惰かの判断をするつもりはない。しかし、共通していることは、雇用形態が個人の働き方を問われ、口出しすると煙たがられる。

一つの職場の状況と個人という関係だけで職を転々とするわけではない。アルバイトは溢れている。他の職場も求人を出して

いるので、「次の場所は他にもある」こと。就労の場と個人、加えて他の職場の求人があるといった両側面が、転職の機会になっている。一つの会社が、提示する勤務形態だけが、個人の勤怠へ影響しているとも断定し難いということになる。

これらを通し、風俗嬢と同じような勤怠現象は、他でも起きていることだと思う。しかし、性風俗業界は、キャストに場を提供し、個々人に源氏名という屋号を持たせ、個人運営がなされている。だから、僕が知るキャストは、自分のペースで責任持って働いていたと感じていたので、個人のメンタルの強さを問うこともなかったのかもしれない。

むしろ、最前線の運営形態である気もしていた。勤怠を通し、個人を問うこと自体が社会から外れてしまっていることだけに目が向けられやすいのではなかろうか。

カラダと労働内容

では、なぜ性風俗嬢に対するネガティブ・イメージが生まれるのだろうか。

何を扱っているサービスか。ここに着目することで、違いは一目瞭然かもしれない。言うまでもなく、「性的行為」に触れる仕事。これが、多くの対人サービス業とずば抜けて違う職である。

当時僕は、世間の「性的行為」に対する認識が、風俗嬢に対するネガティブな印象に、もしくは、相互に与え合っているのでは？という問いを持っていた。

常識とされる解釈は、同時期に複数の人

と性的関係を持つことは淫らである、とされていること。そんなこと言わなくてもそうでしょう、と言われてしまうことだろう。わかりやすい例が、浮気や不倫。

そうした行為を最も反対者となる人たちは、彼氏や彼女、妻や夫、お母さん、お父さんたちであろう。であるならば、当たり前前に認識されている、性的行為の対象も言わなくてもいいほどに決まっているということになる。

彼らは、「新しい人も見つかってよかったね」とか「いろいろな人ととどどど性的関係を持つといいよ」なんて、誰よりも容易く言わない人たちである。むしろ、不特定多数の人と性的行為を持つことに対し、最も、嫌悪感を持ち合う人たちだろう。

いろいろな人と性的関係を持つ人たちを「イチャイチャコミュニケーター・略して、イチャコミュ」なんて言ったら、バッシングがあらゆるところから来そうだ。

性風俗話に戻すが、性風俗に対するネガティブな印象は、当たり前とされている「性的行為」や「性的関係をもつ相手」に対する認識がいかなるものかを映し出しているのだと思う。性風俗は、ご法度と思われる行為を行う場であることが、当たり前であるからだ。当たりの場だけでなく、特定の相手だけと行うのではないので、ご法度意見に拍車はかかる。加えて、生身を使ったサービスに対するお金の支払いがあることも含まれるだろう。一般的に了解されている性的行為に金銭は伴われないことが背後にある。

だが、大賛成とまでは言わずとも、「性風俗に行く男」を了解する彼女や「性風俗で働く女」を了解する彼氏も存在する。みな
がみな、性的行為は（性風俗には可能プレイに境界があるので、どこまでを性的行為とするのかという問いもあります）夫婦や付き合っている相手とだけ行うべきである、と
思っているわけではなさそうだ。できれば、親い間柄だけにしてくれ！レベルの人である。

「性風俗利用者の彼女」たちから聞いた話を上げると、「素人と浮気されるよりプロの
ところに行かれた方がいい」という人。

どうやら彼女たちは、嫌だという前提は、前述した内容と同様のことを思っているの
だが、それほど排他的な感情を持った人たちではないのだ。

また、「性風俗で働く女性の彼氏」たちから聞いた話では、「他の男に触れられている
と思うと嫌は嫌」、「仕事でやってる」、「プライドもってやってそうだし」、「彼女＝風俗嬢だけではないでしょ」と言った具合に、性風俗で働き、性的行為を持つことと浮気は、同等ではないようだ。いずれも、性風俗が、性的行為の場所であるが、性的行為と関係性が常に同等であるわけではないということではなかろうか。

一方、そう割り切れるものではない！と性風俗嬢を批判する話も耳にしたことがあ
った。この話を重ねると、風俗嬢だからしていること、それをどこで行うかで、周辺
の人の認識も変わることに気づかされる。

推定、昭和初期にあった出来事話題だっ

た。夫の浮気相手が「玄人」であり、風俗に行っていたことまで夫はバれてしまった
ようだった。そして、夫が浮気した相手が「玄人」だったことに何らかの敗北感を持
ったそうだ。

こんな具合だった。「玄人に本気になったとか何って示しの付かない話なのか！恥ず
かしい」。玄人に本気になってしまう男は、情けないという印象を受けたし、そこに伴
った感情は、浮気をされたらされた方の恥でもあるかのようだった。

しかし、「玄人」だからこそ起こりうることで「本気にさせられる」からこそ「玄人」
だとも考えられると思う（そうでなければ、リピーターにはなり得ないので）。

そう思うと、きっと今はおばあさんであろう、当時風俗嬢の彼女に会ってみたいと思
ったくらいだった。そんなことから、男が、「情けない」というのも、僕は、完全に
納得できるものではなかったし、妻の「恥」とするのもしがななものかと思った。しか
し、どれも現実であり、発せられる言葉。それもまた現実なのだと思う。人間は感情
ある生き物だから。

彼女が発した、行動はこんな具合だった。風俗嬢は、妻に責められ、妻の介入により
客であり他人の夫である彼とは、別れさせられたそうだ。妻が浮気相手の風俗嬢にお
金を渡したようで、「お金で解決」だったそうだ（一人の妻の解決法？）。

風俗嬢の彼女が本気であれば、「金」を渡されることで、切ない恋になったと思う。
妻としては苦しい心境だっただろう。夫は

そのあと、後ろめたさと切なさを残しただろう。

みな、それぞれの心境を含めた日常を迎えたのだろう、と僕は思う。時が解決しているような気もするが、もしかすると誰もが、操ることの出来ない時間とともに、楽しかった思い、後悔した言動の両方を含め過ごしているかもしれない。

行為に着目したことで、風俗嬢だからしていることが浮かんできた。そして、もう一つ。性風俗嬢という「玄人」だから責められてしまう実態を担っている場合も出てきた。これらは、当たり前になっている「性的行為」の解釈が反映されている可能性があるということだろう。

だが、「性風俗利用者の近くにいる彼女たち」や「彼氏たち」を比べると、行為は嫌だけれども、風俗嬢を了解している場合もあった。違いは何であったのか。風俗嬢が仕事をしている時間に会うのと、そうではない時間である。時間内で会うのか、外で会うのかで、了解の範疇は変わるということ。また、従事している時間で、周辺にいる彼女や彼氏の認識に違いが生まれるということだ。

昭和初期の話は、今でもとても興味深く残っている。「お金で解決」という言葉だ。風俗に行けば、男がお金を払う。妻の支払いにより、感情と払い手の性別を抜きにして言えば、彼女は、普段の仕事のやり取りがなされていたことになる。

もう聞く機会はないので、想像になるが、「お金で解決」を謀られたことにより、一

個人だった彼女は、風俗嬢として意識したということもあるだろう。または、時間外も玄人を徹していたかもしれない。玄人を隠して、徹していただけかもしれない。

そうならば、バシてこじらせたのであれば、男が玄人とのプライベートお遊びに慣れていなかった、もしくは、彼に魅了され玄人を忘れたとか、もしくは、風俗嬢の彼女が、玄人であることを示す何らかの形がなかったのだろう（それは、大きな勘違いの行為へと発展するから、現代の派遣型風俗嬢は店舗型よりリスクだと思う）。

本気恋愛に発展したのであれば、それは、役を捨て性風俗という舞台から出たということでもあろう。

いずれにせよ、一般的に性的な関係を持つこと自体、とても慎重に扱われ、慎重であるのだろう。家族や彼女に堂々と性風俗に行くということや働いているということも言わないよう、誰にでも言う仕事じゃないし、言えない事情が前述の通りだろう。

働きたくなる

人は、言わないことがあるにもかかわらず、「言えない」という言葉になる。ここまで、そうした現象の細部をしてきた（とでも言ってみましょうか）。しかし、僕は、「言えない」現象に対し、そこまで興味はない。

人は、そういうことだって含めて暮らしていることも大事だと思うから。そもそも僕は、この仕事をしたい！とか、これになりたい！という思いがあまりないので、関心は、そこで「働きたくなる現象」だ。

性風俗業界にいると「言えない現象」は、

話題にあがることがなかったよう、彼女たちも当たり前だと分かっている。うまいことやり過ぎて、かわしている人たちと出会ってきたことを振り返ると「働きたくなる現象」への関心に拍車はかかる。

では、風俗嬢という名のやり過ごし上手な人たちは、どこから集まって来ていたのだろうか。

僕が働いていた時期、専門学校生、大学生や大学院生、企業勤めをしている女性が働いていた。そこでしか働けないというわけではない人たちだった。

一般的に現在の性風俗店は、HP や広告で求人を出しており、女性も男性のように性的行為に触れる機会は増えた。女性にとって、敷居が高い業界ではなくなってきている気がする。

男性であれば、性風俗、地域、嗜好で検索をすれば、web 上で店と出会うので、どこで、何かをしたかという自身の性的目的により引きつけられる。女性の場合、労働であるので、それとは違っだろう。

僕自身、バイトを探す女性になりきって、検索をしてみた。収入、時間、身なりこの辺りが検索キーワードになった。

検索していくと、飲食、訪問営業、テレアポ、単発バイトと自分の現状に合わせた都合によって絞られていった。この辺りはまだ、一般的な求人サイトである。もっと、短い時間で高収入、仕事以外の時間を重視させようと思えば、「短時間 高収入」とバイトサイトから外れ、すぐさまブラウザから検索をかけた。だいたいこの辺りから、

女性求人が出てくる。女性限定の高収入アルバイト。チャットレディもあるが、この辺りで風俗店に出会う。

自分の都合により出会うこともあるのだが、一方、店の運営形態の変化が拍車をかけている可能性もあるだろう。昔とは随分変わり、風俗店は増加した。風営法が変わり、店舗型、待合室型は減り、また、これから出すことは不可能に近いが、無店舗型が登場した。派遣型であり、ほとんどの女の子はラブホや自宅に出向く営業形態だ。店舗がないから、HP 上で女の子を紹介する。

インターネットが流通しているので、昔よりも女性が、男性向けの性サービス産業を知る機会が開かれるようになった。男性向けであることには違いないが、女の子も自分がどんな店や女の子と働くのかイメージが付きやすい。加えて、女の子も多様なジャンルの風俗店を知る機会になったとも言えるだろう。性風俗店を通して男性の性癖を知ること、自分の許容範囲や興味を知る機会にもなる。そして、HP 内に求人、応募フォームも用意されている。

応募動機に「HP を見て」という人も少なくはなかった。また、SM に興味があるとか、どんな性癖の人がいるのか知りたい、コスチュームが好きなど SM 自体への興味関心を持っている人もいたので、業界の中でも興味関心により店舗に引き寄せられる。

かといって、興味関心だけで集まってくるわけでもなかった。学費や生活費をそこから出しているキャストもいたので、「お

金」というキーワードも含まれている。

昔であれば、お金が必要で性風俗を選ぶ場合、返済のためという目的があった。僕が小学生くらいの頃から違っていたと思う。記憶に残っているのは、「プルセラ」で、お小遣い稼ぎになっていた。いずれも、「お金が必要」という括りでは、今も昔も変わらない労働理由。しかし、僕が働いていた頃は、金銭的マイナスがあるからたどり着く職ではなく、マイナスになることを憶測して、先手を打つかのようにたどり着いているようだった。

こんなことを考えていたくらいなので、当時の僕は、「昔よりアルバイト求人は増えたのだから、見知らぬ相手と性的接触がある仕事を選ぶとなれば、意を決し、応募してくる職」のように思っていたのではないだろうか。ところが、「受付」をしたことで、「それでもなさそう」という解釈に変わっていたようだ。入店しやすくなっている。

もちろん、それぞれ事情はあったのかも知れない。だが、思っていたよりも、自分のしたいことやこれからについてを懸命に考え、選択しているようだった。普段の時間の使い方や趣味と嗜好、それらに合わせて選ぶ、店舗運営や労働条件があるように。

街中に可視化されない店舗

これらを、「サービスの提供者が増えている」とするなら、いろいろなサービスがあることは、人の多様な欲望の受け皿にもなるので、肯定的に捉えられる。しかし、そう言い切るにはまだ早い気がしていた。

現在の性風俗経営、無店舗型の増加は、



いいことばかりではないとも思っていた。言い換えれば、素人でも登録し、事務所（一人暮らし程度のマンション一室）を借用したらいいので、店舗型よりも安い資金で起業できるのだが、そこからが一筋縄ではいかない現状がある。

広告や SEO 対策をしておかなければ、店が知られることはないので、客の連絡は来ない。さらに、女の子がいるから、始まるため、女の子に教育やフォローをする人がいなければ、女の子はそこで楽しみを見出すことなく辞め、次へ行ってしまう。女の子と経営側、どちらか一方だけでは成り立たない現場だ。

もちろん、それらは、客が来ないことで崩れることもある。ともなれば、店は、客と会わずして、違いに相手に信頼を置くのか。ドタキャンされてしまおうものなら、キャストは受付を信頼できなくなるのだ。

僕は、いくつかの店に問い合わせをした

ことがある。受付がさっぱりわからなかったから、どんな受付対応をされるのか、知りたくなかったからただただなのだが、運営されてない店があることを知った。

なかなか電話に出ないことや何度かけても出ないことがあった。出るが、女の子が出勤していないので、予約話にまでたどり着けないこともあった。今すぐ予約をしようとしてもはぐらかされたり、HP 上に女の子の出勤が曖昧に載せられていたり、すべて問い合わせしてくれたら対応するといったものが、運営されてないと感じた対応の一つだった。

しかし、上記対応が、運営されていないと断言はできない。しっかりと運営されている店舗でも、そうした対応をすることもある。キャストが買い物に出かけていたり、自宅待機をしている場合があるため、例えば案内時間をプレイ中の時のよう、「〇分後にご案内可能です」と言っても、あやふやに聞こえる場合もあるかもしれない。ただ、HP がしっかりしていると、客の安心材料になっているようではあった。

店がいかにして客を信頼するのかということとは難しい。電話予約のため、客が来店するとも限らない現状があった。何を持って必ず来る確約とするのか、ここが店舗型と比べ難しいのだ。非通知によるご予約を受け付けないことや事前連絡を番号通知でしていただくなどの対策がとられている。

来なければ、キャストがいい気するわけがない。他の予約を取れることだってあるため、キャスト・受付ともにいい気はしな

い。冷やし態度をとられようものなら、クソ客とか出禁とか言ってしまうくらい腹立たしい事態なのだ。

多少オーバーかもしれないが、全ては、「信頼関係」から始まっているということかもしれない。しかし、店舗型は、「信頼関係」から始まらずとも、在ること、顔を合わせることで示せていたので、人と人との信頼が、信頼関係の始まりだとは断言できない。

「信頼関係」から始まるとなると個人個人が気を使い合うので、運営のし辛さや働きにくさが生まれるように思う。「信頼関係」を個人個人の関係性だけで言っているのは、互いに窮屈な事態があるということだろう。場所の有無、今となっては HP や広告が信頼にも関係しているのだから。

個人と所属

受付が、電話が鳴るのを待つだけ、そして、鳴るための HP 作成や広報に必死になっているだけだと、コールセンターや IT 系会社になってしまい、風俗店ではなくなってしまう。

僕が何をしていたかを振り返ると、女の子といる時間に何をキャッチして、店と女の子を合わせたら、どこに反映していけるのかを考え、動くこと。役割をもって、その役割を徹していない時間に起きたことを、役割に活かすといった動きをしていた。

これらは、キャストとおしゃべりをしている時、「所属をしないで一人でしてたら手取りは多くなるけど、違うんだよね」という話に影響されていたのかもしれない。

無店舗型は個々人の関係次第という状況を作りやすい。先に書いた風俗嬢との性的行為が、浮気か否かの話のよう、個人で行えば、プロなのかアマなのか分かりにくい。風俗嬢としては成立しないと解釈していた。

僕は、所属をすること、そして、どこの嬢であるか示されることが、キャストが働きやすいと思う環境であると考えていたのだろう。所属していることを表せる振る舞いができる状況かどうか、信頼関係を個人だけに託してしまわない秘訣だと思っていたかもしれない。

アマチュア体験記録

ここで、再度触れるのだが、業界素人の僕が、これまで綴ってきた考えに至る体験をし、また振り返っているのか。だいぶ前に辞めたし、業界のエキスパートを目指している者でもない。当然、経営者でもなかったもので、詳しいことは知らずして、それとなく過ごしていただけだったと言えるかもしれない。しかし、素人の僕が、ボスやその他の受付、そして女の子たちから教えてもらうことが多かった。「性風俗」そして「SM」に対し、ネガティブな印象で認識する世の風潮はあるが、僕は、違う体験をしたのだと思う。

と言うことで、そろそろエピソードに入る。今回のラインアップは、「1. 入店手続き〜書類編〜」、「2. 入店手続き〜名前とビジュアル編〜」、「3. ユニフォーム」、「4. マニュアル」、「5. マニュアルは何処へ」、「6. 女性の前でエロ本を読む」、「7. 拉致られた!?と思った」です。

1. 入店手続き〜書類編〜

初出勤日。確か、「遅番」の18時からだった。

この日、出勤するにあたり雅さんから、「そんなにすることはない」と告げられていた。そうは言われても、多少なりとも不安はあったのだろう。バイク駐車場に到着したのは、20分前だった。喫煙スペースでコーヒー片手に一服をし、店へ向かった。

アルバイト経験はあったから、職場の説明をされるイメージはできていた。しかし、どのような実務を行うのかイメージを持っていなかった。いや、そうだろうか。「性風俗」や「SM」という言葉を意識しすぎ、実務に気が回っていなかったのだと思う。

予定時刻10分前。店の扉を開き、階段を上った。階段一本道、緊張感で先の見えぬ坂道のようなようだった。面接の時に体験した狭い空間、そして、女しかいなかった場所。さらに、彼女たちは応じてくれるが、無言だった衝撃。戸惑いを引きずっていた。

しかし、そんなこと考えなくてよかった。雅さんしかいなかったのだ。密室に女の子がぎょうさんいるより、雅さんと二人の方が、気楽だと思った。

ところが、そうでもなかった。雅さんは、淡々とパソコンの前に座りお茶を飲み、僕は「その辺に座って」と言われそのまま。ワンルームの部屋に男女二人きりといった状況だった。

僕は、雅さんの近く、受付の机の横に近づいていった。「あの〜僕SMってさっぱり

わからないんですけど…」「あ、大丈夫よ」「あ、そうです!？」(この日は、大丈夫だった)。

「この書類書いて」と言うことで用紙を受け取った。『入店届』だった。どの職場でも記載するようなものだった。名前や生年月日、連絡先、緊急連絡先、前職そんなことを書いた。書き終えた後、ポラロイドカメラで顔写真を撮られ、入店届けに貼って完了。

未だに覚えている。あの時の無愛想な顔の写真を。しかも、眉毛を切りそこなっただけに、ラインカットにしていた。ヤンキーが仕事に困り、たどり着いた先が風俗業界だった的に思った。



2. 入店手続きー名前とビジュアル編ー

そこならではの記入項目があった。名前と、体にまつわること。「ここって入ります!？」と源氏名について尋ねると、「そこはいいわよ女の子が書くとこだから」。

「へへへ。あとタトゥーとかも書いてありますけど」、「そこも空欄でいいわよ」、「あ、はい」。結構テンション上がった項目だったのだが、僕には無関係だった。むしろ、今思えば、恥ずかしい質問だったと思う。

源氏名やタトゥーは、店側が知っておくキャスト事項で、かつ、直接接点あるお客さんに提示する事項だ。客の要望から「受付」の立場を言うならば、男の名前だとか服で覆われた中身なんて、どうでもいいのである。どうでもよくないときは、対応に不満があったときくらいで、基本的に受付の名前なんてどうでもいいのである。「受付」という名が、既に源氏名のようなものだと思う。

3. ユニフォーム

この日を迎える前、雅さんから「黒のパンツ、スラックスのような」と「襟の付いたシャツ。白とか」と服の指定があった。領収書を持って来たら清算するとのことだった。

「着替えは、ここでしてもいいし、女の子の前で嫌だったら、あっち(客の待合室)で着替えてもいいわよ」。わざわざ移動しなくてもいいと思い、その場で着替えた。

その服はもう二度と着ることはなかった。黒のスラックスに白のYシャツを購入してきたのだが、どうもそんなの着なくてよかったらしい。店から言えば「黒服」的な格好に見えたようだ。

この日以降、普段履いているパンツとシャツ、不要であるがネクタイを着けて行く

ようになった。一体、スラックスと白のシャツはどんなものをイメージして伝えられたのかは、未だにわからない。

思い当たることと言えば、初対面の日、僕は短パンとTシャツ、キョンキョンに釣り上げたリュック姿で登場していた。少しは、ちゃんとした格好を望まれていただけだということだろうか。

4. マニュアル

僕が入店した店を知る始まりは、「女の子が読むマニュアル」。勤怠、待機室での過ごし方、お客さんとの接客マナーなど、全部で30〜40項目くらいだったと思う。みんなのスタートだ。

「サービス」と記載されている内容は、かくかくしかじか法の下で運営しているから始まり、何を提出していて時間は何時までで、どんなサービスはしたらダメかだったと思う。届け出を出している店であり、そこにある約束は、女の子は、受付案内所（僕がいる建物内）で、会っちゃダメ。時間は日の出から深夜0時までだから、それ以外の時間に待機室にお客さん来ちゃダメ。ざっと言うとそういうことだ。

その他、営業方針だとか、禁止行為、お店のシステム、どこでプレイをするのか、店との連絡について、出勤、予約からプレイ後までの流れなどが記載されていた。もちろん、M嬢さん用と女王様用に分けられてあった。

確か、共通の項目に「向上心を持って努力する」もあった。曖昧だし、懸命に知識

や技術の習得をするイメージを持つ人もいたようだった。だが、僕はもっと手前の過ごし方が、マニュアルに反映されると思った。

僕と彼女たちの過ごし方を振り返ってみると、彼女たちが話し始めると、僕も考えさせられ、月に1度出すイベントコースや限定コースの話しになっていた。経験をイベントに活かしていくキャストを知った。また、イベントにせずとも、だらだら喋ってしまったり、聞いて聞いてという「好奇心」たっぷりのキャストは、リピーターをつけていた。

憶測だが、お客さんとのプレイに関することや自分ができないことを喋ってしまうキャストの方が、無理をせず、自分のできる範囲を見つけ、楽しむことが上手かったのだろう。もちろん、これらはプレイ中は、手探りということもあるだろうが、それ自体をお客さんと楽しむことができる人たちだと思っていた。「好奇心」が「向上心」につながっているかのようだった。

5. マニュアルは何処へ

女の子と話す内容には注意のような項目があった（女の子が読むマニュアル）。自分で判断をするようにとも記載されていた。

このことについて「話していましたが…」と前回女の子同士が戯れていたことに触れた。慣れるまで時間がかかる子もいる、そうじゃない子もいるなど当たり前の返事だった。あと、風俗業界だから、時に大変な子も出入りすることがあるような話もあ

った。「あ、そうですかー」で終わった話だ。

どー考えてもマニュアルのこの項目は、要らないような気もした。みな、自分の判断で呈示していると思ったから。しかし、世間がイメージする風俗嬢に合わせられているような気がして、入り口としては納得する事項でもあった。

それにしても、僕が面接時に見たパソコン前で戯れ合っていた光景とマニュアルが、あまりにも一致していなかった。だから、このマニュアルからスタートするが、人は共に過ごせば、それなりに仲良くなってしまふものだと思った。

6. 女性の前でエロ本を読む

SM が分からないし、興味ないことを告げていた。この日、待機室に置いてある本を手にした。ガサツに置いてあった本を手に取り、パラパラとめくった。

エロ本を堂々と読むことや女の人前にして、いや、そもそも女の人に勧められることってそうそうないことなので、読む自分が滑稽だった。でも、SM に触れたことがなかったからか、堂々と行けたもんだった。知らないが故にやれることは、往々にしてあるものだと思った。



しかし、最初に手にした本は、『マニア倶楽部』だったもんだから、初心者の僕には、ツッコミたくなることが満載だった。

『マニア倶楽部』は、日本に一つしかない「投稿 SM 専門誌」。しかも、排泄が多い号を手にしていただけだから、「雅さん、黄金を希望するお客さんは多いですか？」とか「僕、全然、興奮しないけど受付できますかね!？」とか尋ねた。

「同じ性的嗜好じゃなくていい」「違う方がいい」と言われ、そんなもんかと思った。また、黄金を希望するお客さんが、増える「季節」があると教えてくれた。

僕は、「うんちは季節物」と解釈をし、そうしたこと、限定物だと認識し、とても貴重なものへと変換していた。「それぞれまさに黄金だ!」と、そんな解釈いらぬのに、しておいた。テンションは上がったけど、性的興奮の範囲ではなかった。

でも、「黄金」は女王様が M 男に行く、ご褒美にだったりもするらしく、僕の解釈は安易なものだっただろう。さらに、当時僕が見た『マニア倶楽部』は、目隠しをされて排泄をさせられている写真だったから、これは M 嬢がすることだと判明した。

SM に興味がないという嘘を僕はついていたと思った。ついつい質問をし始めていたのだから。さらに、教えてもらいつつ、誰が、何を、誰に、いつ、行くかで呈示されるものの意味が大きく変わると考え始めていたほどだ。

次々と置いてある本を手にしてみた。プレイをしているように、そして、コスチュームの素材もわかるように映されたグラビアページが連なる『スナイパーEVE』。写真とともに言葉が添えられプレイであるように描写されていた。

また、この雑誌には各地に在る SM クラブ、ラウンジや BAR、そこに在籍する女の子の紹介がされており、僕が在籍することになった店も掲載されていた。

その他、緊縛の本や愛撫の仕方の本などアートなのか身体の不思議なのか、エロなのか、それらをジャンルに分けるなら、分け手の嗜好次第じゃないの、と思うほどに、様々な本が置いてあった。日本には、それだけ、性的嗜好は溢れているし、拘りが混在しているのだと思う。他にも、ジャンプやマガジンも紛れており、どれだけ分かれていようとも全く違う世界で生きている人なんていないということだって感じた。

雅さんが何か探し始めてくれ、「清武くん

はこれが好きなんじゃないかしら？」と『S と M』という本を渡された。「この本ね、男の人が書いてるから、ちょっと違う気もするのよ。読んでみるといいかもしれないわよ。持って帰っていいわよ。読み終わったら元に戻しておいてね」。即、リュックにしまった。

7. 拉致られたと思った

この日の夜、雅さんに「・・・に会ったかしら？」と聞かれ「え??」というと、「今夜時間ある?」「はい」「連れて行くわ」ということで着いて行った。

店を出る前「ご飯食べた?」、「いえ、食べてないっす」「どこか寄りましょうね」。

キャッチのお兄さんや呼び込みをしているガールズバーの女の子たちと酔っ払いで騒つく道を通り、餃子をご馳走になった。

そのまま歩いて別のビルへ。「マジかよ・・・またカーテンかよ(勤めていた SM クラブもカーテンばかり)」と思いながら、入って行った。狭い BAR、ラウンジのような飲み屋だった。しかし、通常とは違った。

騒がしい音楽そして、暗闇、よく見ればテカテカして露出が激しいコスチュームを着た女性たち。気づけば、目の前に長身痩せ型、眉間にピアスにタトゥーマミれの女性が立っていた。

何か大声で喋っているが、声はかすれ声。音楽に紛れていくかの如く、何言ってんのかさっぱり聞こえなかった。とにかく、チラッと見られるその視線は、怖くないわけがなかった。

「お前誰だよ」とか思いながら、「わかった？」と聞かれ、「え?」「わかったか?」ともう一度聞かれ「あ、はい。」ととりあえず、わかったことにしてみた。音楽煩いし、怖いし、帰りたかった。

次の出勤日を告げると、その日は一人で来るように言われた。マジ誰なんだと思いつつ、のちに知ったのだが、この人が責任者で『ルーブル・ガガ』さんだった。

このまま、「タクシーで帰りなさい。次の出勤の時に領収書を持ってきたら清算するわよ」と雅さんに言われ帰宅。

着替えぬまま、座り込み『S と M』という名の本を開き始めた。

今のところ水曜日の 22:00~です。そのうち清武システムズHP に録音のリンクを貼ります。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中!

[『清武システムズ限定コース解禁!!ルートーク about 熟女コース~』](#)

綴り人/しすてむ・きよたけ

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよたけは、アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。既にあるシステムと fet.するという意味で清武システムズです。動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋ら Night!」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyoo です。